

十如是歌考

——『しのびね物語』書陵部本最末歌群を端緒に——

蔵 中 さやか

一

現存「しのびね物語」は、「風葉和歌集」成立以降にあらわされた、いわゆる中世王朝物語後期作品群の一つであり、「風葉和歌集」所載歌三首を含む「古本しのびね物語」が散逸、現在伝わるのは改作本と考えられている。また、伝本関係は三系統に大別され、その校異は「校本しのびね物語」にまとめられている。

本稿は、その三系統の一つ、書陵部本「しのびね物語」末尾の二丁表裏にわたって書き付けられている十首の和歌を端緒にすすめてゆき、その十首の歌の意義・由来および書陵部

本「しのびね物語」との関連性などを分析してみたい。この十首の和歌とは、同系他本には見られない書陵部本独自のもので、その筆致より、書陵部本書写者と同筆と認められる。十首の翻刻は次の通りである。

十によせのうたそうかの七日の千首のうたの中に

によせさう

ありと見る心はたれそますか、みそこなるかけもまことならぬを

によせしやう

かせにはれくもにかくすも何ならずひかりはもとの月のみそすむ

によせたい

くさも木もつゆのめくみをうけぬれは又春秋のすかたとそ
なる

によせりき

敷嶋の道なかりせはあめつちも何のちからにうこきたにせ
ん

によせさ

袖人のひくと見しよりなほき木はつくる心もやすくそある
らし

によせいん

いかにしてたか世にねかふたねなれはいわにもやすくたね
はをいけん

によせえん

なにはかたあしまもおなしえにしあればさわりははてすふ
ねやよるらん

によせくわ

ときしあれば雨に花さく木も又つるにはつゆのみと成に
けり

によせほう

色ふかき御のりの花にあへる身もたなをさりのむくいな
らめや

によせほんまつくきやうとう

根にかへり梢にさくも花はたなおなし色かやかはらさるら
ん

詞書から、この歌群は「十によせのうた」であり、「そ
かの七日の千首」歌からの抜書であることがわかる。

二

では、十如是歌とはいかなるものなのであろうか。既に石
原清志氏が『釈教歌の研究』⁽⁴⁾中の「新古今和歌集」二条院讀
岐歌（一九六五）の箇所で、

「十如是」は『法華経』卷一の第三「方便品」を出典と
する。これを『法華経』の詠歌としなかったのは、天台
の教義に転用せられ、梵文の原典にはなかったものを鳩
摩羅什の漢訳の際に、『大智度論』から転用したといわ
れているからである。

と述べられ、大略を論じておられるが、あえてもう一度とら
え直しておきたい。

「十如是」とは「十如」ともいい、『法華経』「方便品」中
の記載に基き、全ての存在のありのままの姿に十種あるとい

うことをいう。すなわち、

唯、仏と仏のみ、乃ち能く諸法の実相を究め尽せばなり。謂う所は、諸法の是くの如きの相と、是くの如きの性と、是くの如きの体と、是くの如きの力と、是くの如きの作と、是くの如きの因と、是くの如きの縁と、是くの如きの果と、是くの如きの報と、是くの如きの本末究竟等となり。⁽³⁾

という、鳩摩羅什訳の「法華経」のみに見える文に基き、

諸法の実相（存在の真実の在り方）が、相（属性）・性（本質）・体（形体）・力（潜在力）・作（作用）・因（原因）・縁（条件、間接的原因）・果（結果）・報（果報、間接的結果）・本末究竟等（相から報に至るまでの九つの事柄が究極的に無差別平等であること）という十の範疇において知られることをいう。⁽⁴⁾

つまり、十如是歌とは「如是相・如是性・如是体・如是力・如是作・如是因・如是縁・如是果・如是報・如是本末究竟等」を歌に詠む、一種の題詠歌と理解される。同じような教義・経文を和歌に置換する形式のものに法華経二十八品や六時讃などによる詠歌や、法数歌といわれる十案や十戒の詠歌がある。

周知の通り、釈教歌は「拾遺和歌集」時代から盛んになり、勅撰集では「千載和歌集」以降、神祇歌と対置されるものとして独立した部立をもつようになる。選子内親王の「発心和歌集」や寂然の「法門百首」、あるいは「聞書集」、「長秋詠藻」、「拾玉集」にみられる法華経二十八品和歌が代表的な詠である。特に「法華経」は釈教歌歌材としてしばしば採り上げられ、仏教行事の際の詠にも多い。

この釈教歌全体の中で、十如是歌はどのような位置にあり、どのような人々によって歌われ、享受されたのであろうか。

三

「十如」という語は「梁塵秘抄」方便品九首中に、

十界十如は法算木、法界唯心覺りなば、一文一偈を聞く人の、佛に成らぬは一人無し⁽⁵⁾

と詠まれているが、十如是歌としては、勅撰集中に表1の通り、八集計十二首がいずれも「釈教」部中にみられる。初出は「新古今和歌集」二条院讚岐詠である。（なお、以下の表中の和歌は、特に記したものを以外、すべて「新編国歌大観」に拠る。）

重複を避けて、その詠者を順に挙げる。

二条院讃岐・後京極摂政前太政大臣(良経)・寂然法師・大蔵卿有家・入道二品親王法守・前大納言宗明・藤原盛徳

の計七人である。法守法親王以下三人は、『新千載和歌集』、『新拾遺和歌集』、『新統古今和歌集』という十四、五世紀成立の勅撰集に入集している。藤原盛徳は不明であるが、法守法親王、前大納言宗明は、『二十一代集才子傳』にその名がみえ、いずれも南北朝期の人物である。

法守・宗明・盛徳を除外した四人の詠をみると、五集に散見する形となつてはいるが、いずれも同時詠ではないかと思われる。石原清志氏が『釈教歌の研究』の『新古今和歌集』二条院讃岐歌について述べておられる中で、良経・定家の私家集に十如是歌があることを挙げ、讃岐と同時詠であろうと指摘しておられるが、さらに、これに寂然・有家が付け加えられるわけである。

『新古今和歌集』・『新勅撰和歌集』入集歌の詞書にいう「(後法性寺)入道前関白」とは兼実のことを指す。兼実が、法華経を誦じたと考えられる舍利講のついでに、参集者に十如是歌を求めたものであろうが、その面々は、当時の御子左

家中核の人々であった。この時の試みが十如是歌が大きく採り上げられた初めであり、以下の時代に影響を与えたものであろう。

次に、私家集・私撰集中の十如是歌を掲出する。表IIの通り、私家集中には、『秋篠月清集』(良経)、『拾玉集』(慈円)、『拾遺愚草』(定家)、『唯心房集』(寂然)、『関谷集』(作者未詳)、『雪玉和歌集』(三条西実隆)、『桂林集』(一色直朝)に、私撰集中には、『万代和歌集』、『遺関集』にみられる。

さきの表I「勅撰集中の十如是歌」で名のみえた良経、寂然の十如是歌は、私家集にその全歌を留めている。この他、ほぼ同時代人である定家・慈円の詠もある。特に慈円のそれは、僧籍歌人らしく他者の体験詠的なものと比して、仏教色の濃い詠作である。

また、『関谷集』は、『新編国歌大観』第七巻私家集編III解題によると、養和、寿永の頃から鎌倉初期にかけて生存した僧籍歌人の集といい、作者は、中央歌壇との結び付きは考えにくい人物であるという。しかし、時代的にはこの辺りに十如是歌の発生を求めることが出来よう。

『雪玉和歌集』、『桂林集』は、やや時代が下つての詠作である。十如是歌が消失することなく、世情不安定な時代にあ

つて、なお詠まれ続けていることを示す。

一方、私撰集中からは、二集四首が管見に入った。うち『万代和歌集』は良経歌二首を『秋篠月清集』から採歌してゐる。『徳閑集』は、近世、明和五(1768)年撰の集であるが、江戸期まで十如是歌の形式が継承されていたことが明らかとなる。

以上、勅撰集、私家集、私撰集中の十如是歌を通見して述べ得ることは次の通りである。十如是歌は、その発生を平安末期〜鎌倉初期に求めることができる。それは、兼実の手によつて、初めて大々的に取り扱われた。御子左家歌人たちによつて、一種の習作的詠歌がなされ、特に良経の詠は、勅撰集入集という事実が示す如く、高い評価を受けたのである。釈教歌を詠ずることが広く認知されつつある中で、十如是を歌の題材として採り上げるという行為は、単なる桑門歌人の営みの域を越えた一つの新しい試みであつたといえる。この十如是歌が、後々まで釈教歌全体の中で格段にもてはやされたという徴候は窺い得ないが、十四世紀頃の勅撰集にみられる通り「十如是の心を詠む」ということは続行され、「釈教」部中の一つの和歌形式として定着していったことが看取される。三条西実隆や一色直朝といった室町後期歌人の詠がみら

れるのも、時代色の反映であろうか、興味がひかれるところである。また、近世の私撰集中にも十如是歌が存在するということは、時代の流れの中にあつても、この形式が継承されてきた証であるといえよう。

ところで、この十如是歌を一つのパターンとして組み込んでいる和歌形態がある。それは表Ⅲに示したような千首歌である。(表Ⅲのうち、「宋雅千首」については佐藤恒雄氏の御指摘を参考に、一類本、四類本の二種を掲出したが、該当部に関しては異同はなく、したがつて、表中の両本は同記載である。)『宗良親王千首』は、天授三(137)年春ごろの詠、以下順に、『耕雲千首』は天授三(137)年、『為尹千首』は応永二十二(145)年、『宋雅千首』は応永二十七(142)年の詠作で、いずれも長慶天皇や足利義持に奉られたものである。

春・夏・秋・冬・雑各二百首を要求される千首歌において、十如是歌は、雑二百首中の釈教歌という部類の中にその位置を見出している。もちろん千首歌中には、『正徹千首』のように十如是歌を含まず構成されているものもある。表Ⅲ中にみる詠者が、二条派歌人耕雲や、非二条派歌人——冷泉家の為尹・飛鳥井家の宋雅であることから、十如是歌の支持・不支持が歌道家によるものとも考えられず、詠者個人の選択に

その採否が任ざれていたと思われる。

とりあえず、ここに、良経がパイオニアとなつた釈教歌の一形態である十如是歌が、室町期に受容され、定着していた事実をみることができる。

四

さて、このように縦覧してきた十如是歌であるが、本稿一で掲げた書陵部本「しのびね物語」最末歌群（以下、「しのびね物語」十如是歌、と称す）は、どの十如是歌であろうか。また、最末に十如是歌を付した書写者の意図はどのようなものであつたのであろうか。

「しのびね物語」十如是歌は、ここまでの考察から、表Ⅲ最末の『宋雅千首』（一類本では『榮雅千首』、四類本では『雅縁御千首』）であることがわかる。つまり、詞書「そうかの七日の千首」は、『宋雅の七日の千首』であつた訳である。では、この「七日」とは、一体、何に由来するものであろうか。

井上宗雄氏及び佐藤恒雄氏によれば、『宋雅千首』は、応永二十七（1420）年十月一日〜十日にかけて將軍義持の不例平

癒を北野社に祈つたもので、「七日」という限定を要するものではない。ここで興味深いのは、『言繼御記』の享祿二（1529）年二月七日条にこの千首の名が見えることである。これは、概に佐藤氏が御指摘になつておられるが、当該部引用は次の通りである。⁹⁸⁾

七日、癸酉、天晴、雨下、今日も正親町へ罷候て草紙を書候、

去年九月より立筆、今日八時分に終功候了、耕雲之千首、

宋雅千首、^{四五}以上三千首也、時々暇隙に罷候て書寫候者也、

正親町へ草紙書写のため出向いた記事が、再三みられた後の本文である。

「しのびね物語」十如是歌詞書の「七日」が、この『言繼御記』記載に拠つたものであるとすると、「しのびね物語」

本文最末部にこの歌群が記されたのは、『言繼御記』流布後と限定されよう。大永七（1527）年〜天正四（1576）年以及ぶ記録期間をもつ『言繼御記』は、戦国期資料として借覧、流布したものと考えられる。そのうちの一享受者が、「しのびね物語」書写後、この十如是歌を書き付けた、あるいは『言繼御記』記載により「宋雅の七日の千首」という呼称が一般的になつた時期に、「しのびね物語」書写者がこの十如是歌を書き付けた、と類推されるが、その時期は、江戸初期あたり

まで下るものであろう。これは、書陵部本の年代とも一致をみるものである。

次に本文について触れる。先に述べたように「宋雅千首」は一類本・四類本ともこの箇所と異同はみられないが、「しのびね物語」十如是歌と比較すると、一箇所の異同が存する。それは如是因歌である。一類本・四類本とも、

いかにしてたが世に願ふ種なれば岩にもやすく松は生ひけん⁽⁴⁹⁾

となっているが、「しのびね物語」十如是歌では、結句が「種は生ひけん」となっている。「古今和歌集」恋・五一二（説人しらず）に、

種しあれば岩にも松は生ひにけり恋をし恋ひば逢はざらめやは

とあるのをはじめ、「後撰和歌集」・恋・八〇七に、

種はあれど逢ふ事かたき岩の上の松にて年をふるはかひなし

という歌がみえ、『拾遺和歌集』にも

岩の上に生ふる小松も引きつれど猶ねがたきは君にぞ有りける（恋・六四八）

岩の上の松にたとへむ君々は世にまれらなる種ぞと思へ

ば（雑賀・一一六五）

があるように、松が、岩の上に種から成長する。という常套的な言い回しがあり、同じ十如是歌でも良経がこれを用いていること、歌の本末で同じ「種」を詠み込むことは不自然であることから、この箇所は「しのびね物語」十如是歌の誤写であると断じてよい。

最後に、「しのびね物語」最末部に、「宋雅千首」中から十如是歌が抜書された理由について考察を加えたい。

「しのびね物語」は、男女主人公の悲恋を描く、典型的な擬古物語である。最終的に横川で出家する男君、一方、帝に愛されて女御となり、やがて女院となる女君。そして二人の間にも生まれた若君は、中納言として幸福に世を過ごす。この小さくまとまったストーリーの展開には、仏教的な相互連環、如是本末究竟的な色彩が感じられる。すなわち、相から報の帰趨するところは結局同一であり、それが実相であるという十如是の仏教理念に重複する展開なのである。外観も原因も結果も報いもすべて同じところに帰結する、つまり、物語中の各登場人物が過程はともあれ結果的に、それぞれ満足感をもち得るような形で終結しているのである。

詠歌内容をストーリーと密着させると、たとえば、如

是果の歌は、

時しあれば雨に花咲く木々もまた遂には露のみとなり
けり

歌意は、「ちようどその時期にあるので、雨中に花開いて
た木々もまた、最終的には露に濡れた果実となつてしまつた
（何事も時が経てば自然の結果をもたらずものだ）」である。
ここには、男主人公との恋に悩みながらも結果的には帝の愛
に支えられた女主人公の生の軌跡をうかがうことができる。

また如是報の

色深き御法の花にあへる身もただなをざりの報いならぬ
や

は、歌意が「色深い御法の花にあう身（法華経を学び、仏に
仕える我身）は、ただいい加減な報いでありませんか、い
いえ、これは前世の業因の報いであるよ」である。この心情
は、まさに出家時の男主人公の心中と一致しよう。

かつて尼君と暮っていた女主人公と、出家する男主人公—
という物語設定に、仏教的環境ともいうべきものを見出し得
なくもないが、作品全体を見渡した時、やはりその展開その
ものに十如是という仏教理念との共通性を看取つたと考え
たい。

以上、釈教歌中の十如是歌という形式の詠歌を主題に、そ
の発生と享受、また享受の一例としての「しのびね物語」書
肆部本最末歌群の意義を論じてみた。各詠者ごとの詠みぶり
の差、他釈教歌、たとえば二十八品和歌等との比較にまでは
至らなかつたが、十如是歌の一面はとらえることが出来た
と考える。釈教歌は、その特殊性ゆえに論じられることが少
ないのであるが、各形態それぞれに通史的な流れをおさえる
ことも一つの試みとして必要なことではなからうか。

〈注〉

(1)大規修・槻の木会編。『校本しのびね物語』（和泉書院、平成
元年三月発行）

(2)石原清志氏「釈教歌の研究」（同明舎、昭和五十五年発行）

(3)岩波文庫「法華経」上・妙法蓮華経・方便品。

(4)岩波書店編「仏教辞典」に拠る。

(5)本文は日本古典大系本（岩波書店）に拠る。

(6)明治書院編「和歌文字大辞典」宋雅千首の項に拠る。以下の佐

藤氏の御説はすべてこれに拠る。

(7)井上宗雄氏「中世歌壇史の研究 室町前期」（風間書房、昭和

三十六年発行）

(8)本文は国書刊行会本に拠る。

(9)表記は、稿者が適切なものに改めた。以下の和歌引用についても同様である。

〔平成二年八月二〇日記〕

本稿執筆後、「解釈」誌十月号（平成二年十月一日発行）に、谷知子氏「藤原良経の十如是の歌について」が掲載された。良経の十如是歌の解釈を主たる目的とされた氏の御説は、本稿で触れ得なかつた十如是歌の和歌表現、発想面における指摘を含んだものであり、お教え頂く点が多い。

（本学大学院博士後期課程）